

短期集中英語講座が学習に及ぼす効果

大石晴美・John Clayton*・足立 望・小林憲一郎**・森 英樹・Randy Prescod

Effects of a Short-term Intensive English Program on Language Learning

Harumi OISHI・John CLAYTON・Nozomu ADACHI・Kenichiro KOBAYASHI
Hideki MORI・Randy PRESCOD

Abstract

Foreign language education is changing to meet the particular demands of society and the times. The Summer Intensive English Program at Gifu Shotoku Gakuen University has been developed since 2007 based on the Army Method, Audio-Lingual Method, Communicative Language Teaching, and the distinctive features and research interests of the language teachers to meet current students' needs.

In this paper, the background of this course, its objectives, and its classroom activities are stated and analyzed with supporting data from student questionnaires. According to the survey results, combining these three teaching methods and creating a site-specific, student-based classroom setting were effective in raising students' motivation.

Key words

short-term intensive program, language learning, motivation, students' needs, student-based classroom

1. はじめに

岐阜聖徳学園大学では、2007年から毎年夏に10日間のスケジュールで集中英語講座を実施している。言語をある一定期間、集中的に学習することは、語学力を向上させることに効果的であり、通常の定期的授業と相補う形で作用すると思われる。

本講座は、口羽（2007）によって、1961年に、コーネル大学で開催されたインドネシア語集中講座の受講経験が紹介され、語学学習には集中的学習が効果的で、英語教育に応用の可能性を示唆されたことに始まる。そこで、口羽（2007）の報告にもとづき、当時のインドネシア語集中講座を分析し、本学の英語教育に応用しようと試みた。本講座の企画にあたり、英語教授法の理論をもとに、コミュニケーション能力の養成に焦点をあて、動機づけを主眼に置いたカリキュラムを考案した。

本稿では、第2章で研究の背景として、英語教授法の歴史と動機づけの理論の概観、第3章で理論を取り入れた本英語講座の実施概要とカリキュラムの特徴について述べる。第4章で受講者へのアンケート分析と意見聴取による講座の内容検討を行う。第5章で講座の意義と成果、第6章で、これらを考察して今後の課題を提示する。

2. 研究の背景

2.1 英語教授法について

英語教授法の歴史は、英語教育論が社会的な情勢に左右されてきたことに影響する。わが国では、1922年に Palmer が文部省の外国語教授顧問として来日し、提唱したオーラル・メソッド(oral <direct> method) から始まり、さまざまな教授法が紹介されてきた。本項では、本講座の目的に合わせて、英語教授法の検討を行う。

2.1.1 コーネル大学インドネシア語集中講座：Army Method について

口羽(2007)では、1961年にコーネル大学で実施されたインドネシア語の集中講座が紹介されている。その内容は、1) 授業時間は週5日、合計週8時間(3日間は2時間ずつ)。2) 受講者は、1クラス10数名、3) 毎日1時間、暗記したセンテンスを母語話者の助手が英語で模範を示し、学生にインドネシア語で繰り返させる。3) 基本センテンス、発音、応用、リスニング、会話、基本文法の練習をする。4) 週1回の予告なしのテスト。テキストは、「SPOKEN INDONESIAN」と題するもので、インドネシア語と英語の両方で記されており、パターン・プラクティスのみで構成されている。成果としては、1学期の中頃からインドネシア語で簡単な会話をはじめることができると報告している。

この報告によると、ここで使用された教授法は、Army Method と呼ばれるものを参照していることが分かる。Army Method とは、アメリカで、第二次世界大戦中、外国に関する情報を含め、通訳活動を行うために外国語が運用できる人材を短期間に養成することを目的に米軍に語学学校が設置され、開発された短期集中教授法である。特徴は、1) 短期間の集中講座であること 2) 少人数(10名程度)であること。3) 文学作品の購読ではなく、実用的な構文の口頭練習であること、と報告されている(田崎, 1995・白畑他, 2005参照)。

この教授法をとりいれた授業は、アメリカ人の教師が、対象言語と英語の文法構造の違いを講義する主任指導者と、主任指導者の指示に従って口頭練習を行う「インフォーマント」と呼ばれる助手とのチーム・ティーチングで行われた。インフォーマントは母語話者がつとめ、インフォーマントのモデルの後に続いて反復練習を行うのが特徴である。反復練習は、模倣と記憶が中心で、「ミムーム練習」と呼ばれた。1943年4月から12月までの9ヶ月の間、インドネシア語、日本語を含め28カ国語の集中講座が組まれた。教育効果は目覚しく、著名な研究者たちも輩出している。

2.1.2 Audio-lingual Method について

Army Method は、戦後、Fries (1945) によってその成功を踏まえて、外国人の英語教育を対象に Audio-Lingual Method (AL 法) としてまとめられた。この教授法は、行動主義に基づく方法であり、「外国語は口頭練習から始める」ことが良いとされ、言語は、「習慣強化」を通じて獲得されるという考えである。教師側は、正しい文を提示し、学習者は、それを模倣する。次に、指導者は、新しい単語を学習者に提示して、学習者は、その単語を代入して同じ構造の文を作成する。正しい文が形成されれば、良い「習慣」として評価され、間違った文が形成されれば悪い「習慣」として否定的な評価が下される。そして、良い評価が下された「習慣」だけが、強化されていく。

AL法では、明示的な文法の解説は行われず、学習者は、単純にパターン（Pattern）の記憶が要求される。パターン・プラクティス（Pattern Practice）による特定の文構造の繰り返し練習をして、構文が自動的に用いることができるようになるまで続けられる。

この方法では、授業はパターン・プラクティスに基づいて行われ、学習者が自ら自由に言語表現をする機会はない。指導者は特定の文法や構文のルールに基づいた反応を期待している。また、学習者が自由な言語表現を発する働きかけはさけることが特徴である。1950年代から、AL法の是非が問われはじめたが、日本での英語教育は、今日でもAL法は用いられている。指導者から提供される情報も、学習者から発信される情報も、それぞれパターンが決められているため、互いに何が期待されているのか把握しやすいという特徴がある。

2. 1. 3 Communicative Language Teaching (CLT) について

1950年代、Chomskyらによって、AL法が疑問視されるようになった。彼らは構造主義言語学の限界を指摘し、また言語学習におけるAL法の妥当性について疑問を投げかけた。そして、1960年代に言語指導理論としての価値を疑われるようになった。次第に英語は、「コミュニケーションのための英語」「道具としての英語」に重点置かれようになり、Nunan (1991)により、Communicative Language Teaching (CLT)が提唱された。CLTは、AL法とは異なり、その主たる目標は、完璧な文法構造の習得や母語話者の発音の模倣ではなく、学習者自身が自らの表現で意味のある表現をし、意志伝達ができるようになることである。

Nunan (1991)は、CLTの5つの特色をあげている。1) 目標言語を用いた交流を通じたコミュニケーションの学習を重視する。2) 学習場面の中に正しい文章を導入していく。3) 学習者が言語だけでなく、学習過程にも焦点を当てる機会を用意する。4) 教室での学習に寄与する重要な要素として学習者自身の個人的な経験を向上させる。5) 教室内の言語学習と教室外の言語活動を関連付ける。

いわゆる、「教室内で学習される言語」と「教室外で使用される言語」の橋渡しをし、学習者が言語を使用する必要性や学習する目的に対しても注目している。したがって、実際の教室では、学習者同士の交渉や協働を必要とするペア活動や集団活動、言語表現の流暢さに重点をおいた言語活動、言語の使用方法を学ぶロールプレイなどの活動の中で、文法や発音の方法も学んでいくという考えである。

この教授法では、言語を手段として用いたインタラクションを重視し、「概念・機能シラバス (Notional-Functional Syllabus)」を使用し、学習者がさまざまな場面状況において「目標言語 (target language)」を用いることができるように指導することが好ましいとされた。学習の成功は、学習者が社会言語学的側面を持つ「コミュニケーション能力 (communicative competence)」をどれだけ高めることができたかにより評価される。

CLTは、指導者が学習者の言っていることを理解できれば十分である、という考え方に問題があるとされている。つまり、日本人英語教師は、学習者の日本語なまりの英語が発音の面でも構文の面でも十分理解できるため、同じ母語をもつ学習者が目標言語を学ぶ際にその間違いに気づくことができないという問題点があると指摘されている (<http://jawikipedia.org/wiki/AL> 参照)。

2. 2 学習者の動機づけにつながる

Gardner & Lambert (1972)をはじめとし、動機づけに関する研究は、数多く報告されており、

英語力との因果関係については、高いことが実証されている。Dornyei (2001) でも、動機づけのような心理的要因と英語力が高い相関関係にあることを示している。動機づけの種類として、英語を話す友人や先生とコミュニケーションがしたいとする統合的動機 (integrative motivation) や入学試験、TOEIC や TOEFL のような資格試験で得点を向上させる道具的動機 (instrumental motivation) があげられる。

また、Keller (1983) は、「ARCS 動機づけモデル」を提唱し、学習意欲の要因を「注意喚起、興味・関心 (Attention)」、 「関連性 (Relevance)」、 「自信 (Confidence)」、 「満足感 (Satisfaction)」の4つに分類しており、その4つの要因を考慮し動機づけを行うことで学習意欲を高めることができると主張している。

この4要因のうち、「注意」は、学習の初期段階に学習課題に目をむけさせ、また中間段階では飽きさせないように工夫をすることが要求され、学習することの楽しさを知らせ、探求心を刺激することで学習の価値を認識させる。「関連性」は学習者の期待感、「自信」は価値観につながる。学習意欲を内面から高める要因として学習者自身が学習の意義を感じることで、達成の可能性を感じる事が重要である。それを支援する環境づくりが授業／教材の設計者に求められている。これらの要因は、学習者側から見ると「面白そうだ」、「役立ちそうだ」、「何かありそうだ」、「楽しそうだ」などの意欲で表わすことができるとしている。

3. 岐阜聖徳学園大学夏季集中英語講座について

夏季英語講座の概要について、まず、集中英語講座を企画した目的、概要、講師について述べ、次に、2009年度の例をとりあげ、受講者、クラス分けの方法、スケジュール、授業内容の順に述べる。

3.1 本英語講座の目的

本講座は、集中英語学習によって、本学の学生の英語力向上を狙いとともに、学外に開放することで社会貢献としての目的も果たしている。授業内容は、これから英語圏にホームステイに出かける人、ビジネスで英語を使用する人、英語圏の人々とコミュニケーションをしたいと思っている人などを対象に、英語コミュニケーション能力の養成をしている。

3.2 本英語講座の概要

前述した Army Method は、機械的学習で、実際のコミュニケーションを想定しているものの、自由な会話が含まれておらず、その点が問題視された。そのため、現代の英語教育に即応するために、Army Method の概念を取り入れた発音や構文の練習に加え、現在日本の英語教育に求められているコミュニケーション能力の養成に焦点をあてたカリキュラムを考案した。

本英語講座は、全10日間1日4時間、計40時間の集中講座である。授業内は、英語のみでのコミュニケーションが原則である。日本での英語学習においては、英語圏で学習するように自然に英語を身につけることは不可能である。英語表現を運用する第一歩として、単語や表現方法を記憶することが不可欠となる。その点で、Army Method や Audio-Lingual Method でのパターン・プラクティスや発音指導が要求される。

さらに、CLT の特徴を利用し、受講者同士が英語でコミュニケーションする活動を行い、講

師は受講者同士が話しているのを聞いて、必要があれば手助けしたり、誤りを直したりする方法を利用した。

3.3 講師

本講座の講師陣は、英語を母語とし、英語教育関連の修士号以上を取得している。さらに、日本語の特徴および文化にも慣れ親しんでいるために、日本と英語圏の文化の違い、日本語と英語における表現方法の違いを考慮して指導することが可能である。

3.4 受講者 (2009年度)

男性13名, 女性20名

受講前の英語力: 英検: 準1級 1名, 2級 6名, 準2級 4名, 3級 5名

TOEIC: 850点以上 1名, 800-850点未満 3名, 750-800点未満 1名,

700-750点未満 1名, 600-700点未満 3名, 550-600点未満 1名,

400-500点未満 2名, 国連英検C級 1名, 観光英検2級 1名, 初級 1名

3.5 クラス分けの方法

受講者を3つのレベルにクラス分けをした。プレイスメントテストは、ライティングとスピーキングテストで行われた。ライティングテストは、課題を提示し、40分間内に書いてもらうものである。採点方法は、1) Content 2) Organization, 3) Vocabulary 4) Language use 5) Mechanics について Jacobs 他 (1981) を参照に評価した。スピーキングは、英語母語話者講師と1対1で5分間の会話をし、その会話から次の点について5段階で評価した。1) Communicative Ability, 2) Fluency, 3) Vocabulary, 4) Non-verbal Strategies, 5) Grammar, 6) Pronunciation。その合計得点の上位より、上級クラス11名, 中級クラス12名, 初級クラス10名に分けた。

3.6 スケジュール (表1)

1日4時間のうち、1時間目は、文法重視のパターン・プラクティスと発音指導を行う。2時間目は、パターン・プラクティスで学習した項目に焦点をあて、リーディング、ライティングを行い、実際の読み物に触れたり、自らの意見を書くことによって表現したりする。3時間目では、例えば買い物、道案内、料理の表現、音楽の説明や人にものを頼む、反対の意見を述べるなど自らの意見を話すことを通して表現練習をする。4時間目では、人前で話すことの訓練をする。これらの活動は、本講座の最終日の修了式の際、プレゼンテーションとして披露される。

1時間目から4時間目まで、関連した項目、関連した内容、および、同じ講師と話の展開をすることによって、語彙力、文章構成力を向上させていくことができる。いわゆる、Army Method や AL 法で習得にした言語項目を実際に英語を使用する環境で使うことができる状況を設定することにより、それぞれの教授法の短所を補い、長所を組み合わせていることが特徴である。これらの活動では、コミュニケーションに臨場感をもたせ、受講生を「のらせる」さまざまな工夫が加えられている。講師たちは、さまざまな英語教材からアイデアを集めてティーチングプランを作成した。それぞれのクラスで、理解度をチェックするために、小テストを実施し、ライティングの宿題で理解度をチェックし、講師は、そのフィードバックをする。こうして、10日間の受講者と講師とのコミュニケーションを行うことで英語力の上達につなげる。

表 1 夏季英語講座のスケジュール

	Aug. 17 Mon.	18 Tues.	19 Wed.	20 Thurs.	21 Fri.
①10:00-10:50	Guidance	Basic English (Grammar Quiz & Pronunciation Practice)			
②11:00-11:50	Placement Test	Listening & Speaking			
③13:00-13:50	Speaking Test	Reading, Writing & Discussion			
④14:00-14:50	Communication	Presentation			

	24 Mon.	25 Tues.	26 Wed.	27 Thurs.	28 Fri.
①10:00-10:50	Basic English (Grammar Quiz & Pronunciation Practice)				Preparation for the presentation
②11:00-11:50	Listening & Speaking				
③13:00-13:50	Reading, Writing & Discussion				12:00-14:50 Closing Ceremony: Presentation
④14:00-14:50	Presentation				

3.7 授業内容

授業内容は3つのレベルで大まかに統一をしたが、細かな内容については、受講者のレベルや関心事に応じて進められた。また、それぞれの講師の特性を重視し、講師の得意分野を生かすために、詳細な授業内容、指導法は、講師各自の裁量に任された。次に、中級レベルの授業内容と到達度を担当講師の観点から紹介しておく。

3.7.1 発音、構文指導

本講座の受講者層は、大学1年生、社会人、退職者までさまざまであった。まず、この授業でどのようなことを学びたいかという質問を授業の最初に質問をした。その回答として、発音の上達について、すべての受講者が関心を持っていることが明らかになった。

本講座の多くの受講者は、自分たちの発音能力が、英語の流暢さをさまたげてしまい、母語話者とコミュニケーションをするときに十分な意志伝達ができないと感じており、授業中のさまざまな場面、たとえば、英文を読むとき、自らが書いた文章を口頭で発表するとき、会話をするときにアメリカ英語の標準発音をしたいと主張していた。

そのため、授業の中では、日本語と英語の違いについて、日本語には存在しない英語の母音や子音に焦点をあてて解説した。さらに、英語を発音するときの舌や口の形、イントネーション、文節におけるストレスの繰り返し練習をし、発音トレーニングを行った。

日々の口頭練習で、特に、“R”と“L”、“TH”、“V”と“B”の発音方法の違いに注目した結果、10日目には、これらの違いを認識し、英語の音を聞き分けることができるようになった。す

すべての受講者が、完璧に違いを認識できたわけではないが、違いに気づくことや彼らの意欲によって、かなり発音能力は上達したと感ずることができた。

3.7.2 ジャーナル・ライティング

毎日の宿題の中で、ジャーナルを書くことが課せられた。ジャーナルを書くにあたって、単に、事実や活動を説明するだけでなく、受講者自身の興味や感じたこと、日々の授業の感想などを書くように教示した。内容例としては、授業を通して、面白かったこと、もっと勉強したいこと、クラスメートと学習することが英語の上達に役に立っていることなどが記されていた。

提出様式は特定せず、手書き、ワード文書の形式、電子メールでの提出を受け入れたため、学習者が自らのスタイルやペースで宿題に取り組むことができ効果も上がった。たとえば、電子メールで、翌朝の8:00までに提出されたものについては、当日の授業の前にフィードバックを返すことができた。このような即座の対応が、学習者の動機を高め、書く能力を高めていくことを確信した。

10日間のジャーナル・ライティングを通して、ライティング能力が目覚ましく向上した。特に、文法事項の誤りに自ら気づくことができるようになった点が効果的であった。また、受講者は、授業中には、発言できないことも、ジャーナル・ライティングを通して主張したり、講師に伝えたりすることができ、授業中の話ことばに加え、書きことばでのコミュニケーションが成立し、受講者と講師の相互コミュニケーションがより豊かにできた。

3.7.3 コミュニケーション活動

「何を学びたいか」という問いに対して、標準発音を身につけることに加え、受講者たちは、実際にコミュニケーションが流暢にできるようになりたいと強く希望していた。そうした要望に応えるために、単に発音トレーニングや構文や文法、英文を理解することや書くことだけでなく、受講者が互いに夏休みの計画、これまでの英語学習方法、自分自身の経験などを話す場を持った。

それぞれの受講者は、同じような学習経験があり、何年も英語を勉強してきたが、彼らの英語力を向上させる母語話者やそれに相当する相手と話す機会がなかったという認識を持っている。そのような中で、ライティングをしたり文法を学んだりすることよりも、同じクラスの受講者や講師、また、他のクラスの受講者と互いに英語で話したりする機会を設けた。

また、2日に一回は、自ら選んだトピックで発表をすることを授業中の課題として実施した。このアクティビティでは、プレゼンテーションのアウトラインを5-10分で作成し、3分で発表をすることとした。短い発表の時間を設けたのは、受講者たちに自らの考えを確認するだけでなく、全体の内容をまとめて書く能力を身につけさせることが目的であった。書いた内容を単に「読む」形式の報告ではなく、受講者は、短いアウトラインをもとに、英語で報告し、その場の質問に適宜、「即興」に対応するためのいわゆる英語でのプレゼンテーション能力養成のためである。

発表の練習を始めてから2日間は、人前で話すことを躊躇し、心理的負担があったようであるが、第1週の最後には、これまでの知識を利用して自信をもって発表することができ、互いに質問をしあうことができるようになった。

3.7.4 プレゼンテーション

本講座の最終日の“Closing Ceremony”で、各クラスごとにプレゼンテーションをすることを計画した(表1)。たとえば、中級クラスの受講生たちは、3つのグループに分けられ、それぞれにトピックを選び、グループ間でプレゼンテーションの方法やそれぞれの役割を話し合い、準備した。そのグループのメンバーは、年齢、学習背景、レベルを意識することなく、ランダムに構成された。そこでは、異なる年齢や学習背景の人々と意見交換をすることが求められた。グループ分けをした初日は、とても静かで、なかなか英語で話し合うことができなかったが、1週目の最後には、彼ら自身で、プレゼンテーションのトピックを決め、役割を割り振っていた。

グループの発表内容は、次の通りである。第一グループは、パワーポイントでオーストラリアの写真を利用し旅行の紹介をした。第二グループは、ヨーロッパの文化について、英語会話のスキットを演じ、第三グループは、北アメリカ旅行を通し、異文化理解をすることの難しさを語った。

4. アンケート結果

受講期間の最終日に、受講者に対してアンケートを行った。その結果を以下に記す。各アンケート項目に続き、回答者数を示す。

4.1 選択式の質問

表1 アンケート結果(選択式)

1	授業の内容・レベル・進度		2	授業中の発言	
	大変難しい	0		良く発言した	2
	難しい	7		発言した	10
	適切	24		時々	19
	易しい	1		ほとんどしない	1
	大変易しい	0		しない	0
3	先生の英語		4	英語力の向上	
	よくわかった	19		とても向上した	7
	わかった	9		向上した	21
	部分的にわかった	4		どちらとも言えない	4
	よくわからなかった	0		あまり向上しなかった	0
	わからなかった	0		向上しなかった	0
5	この講座の評価		6	自分自身につける成績	
	素晴らしい	20		素晴らしい	1
	良い	11		良い	24
	普通	1		普通	6
	あまり良くない	0		あまり良くない	0
	良くない	0		良くない	0

7	教室のサイズ		8	講座費用	
	適切	21		高い	1
	まあまあ適切	9		どちらかといえば高い	2
	どちらとも言えない	0		適切	12
	あまり適切でなかった	1		どちらかといえば安い	7
	適切ではなかった	1		安い	10
9	受講期間（2週間）		10	次回の参加希望	
	長い	0		とても参加したい	24
	どちらかといえば長い	3		どちらかといえば参加したい	6
	適切	19		わからない	1
	どちらかといえば短い	13		あまり参加したくない	0
	短い	2		参加したくない	0

4.2 自由記述欄回答

選択式のアンケート調査に加え、自由記述欄を設け、講座について、良かった点、改善すべき点など、自由に記述するよう指示をした。以下、自由記述欄の回答を1)少人数、短期集中学習、2)発音指導、パターン・プラクティス、3)コミュニケーション活動、4)動機づけの観点に分類して紹介する。受講者の生の文章であるが、固有名詞の削除、文章の流れなど一部変更した。

4.2.1 少人数・短期集中学習について：Army Method を取り入れた点について

- ・少人数で行えたことがよかった。
- ・10日間たくさん英語（特に会話）のシャワーをあびることができてよかったです。家に帰っても頭の中が英語でいっぱいでした。
- ・英語をたくさん聞くことが出来た。
- ・外国の方と話す機会があまりないので、一日中生徒の方や先生と英語で話すことが出来て良かった。
- ・英語を多く使ったことがよかったです。
- ・英語だけの環境で学習できたことが何よりよかったと思います。
- ・一日中英語で過ごせたので良かった。周囲の人がそうしてくれたから自分も日本語を使わなかったと思う。
- ・何か一つのことに焦点をあてると、この短い期間でも集中して取り組めるのだと感じた。
- ・毎日日記を書く習慣ができたこと。
- ・Each class has 10 students. The quality of our teacher.

4.2.2 発音、パターン・プラクティスについて：Army Method および Audio-Lingual Method をとり入れた点について

- ・自分の苦手な文法を中心に行ったり、発音を詳しく教えてもらったりすることができて良かったです。また、知らなかったことを学べたので良かったです。

- ・英語がよく聞き取れるようになり、発音を直してもらえた。
- ・発音とかいつもの授業でなかなかみてもらえないところもひとりひとりとても細かく見てもらえて良かったです。
- ・発音にウェイトを置いてやってもらっていた点。これまで発音に対して深く考えていなかったが、この講座で発音の大切さに気づいた。
- ・発音なども向上する点。
- ・Speech や acting を通して、緊張したなかで英語を話すことを学んだ。

4. 2. 3 コミュニケーション活動について：CLT を取り入れた点について

- ・先生の優秀さを感じました。多くの人と交わることができた。
- ・クラスメイトが互いに助け合ったりなど、とても良い雰囲気だった点です。
- ・プレゼンテーションをたくさんやって、いろいろな人の実体験や趣味などを英語で聞いたこと。
- ・英語でディスカッションをしたこと。
- ・直接英語のネイティブスピーカーと話せたこと。
- ・時間の無駄なくリーディング、ライティング、スピーキングに集中して勉強できた。
- ・先生やクラスメイトの色々な考えを学べた。
- ・英語でコミュニケーションをとる機会が多かったこと。一般の人たちとも触れ合えて良かった。
- ・英語会話（コミュニケーション）がネイティブの先生と直接できた点がよかった。
- ・スピーキング向上のために発言の場をたくさん持ってきてくれたことがよかったです。学校とは異なり色々な年齢の人と話せたこともよかったです。
- ・プレゼンの準備、食事、休み時間等、英語でやりとりできたこと、そうするように先生が意識付けてくれたこと。いろいろな職種、世代の人がいたことがよかったです。
- ・ふだん英語で考えたり話し合ったりしないようなテーマについて英語でやりとりできたこと、英語で話し合いながら、一つのもの(=プレゼンテーション用のビデオ)を作り上げたことは、とてもよい経験になりました。
- ・英語でコミュニケーションをとる機会が多かったこと。一般の人たちとも触れ合えて良かった。
- ・たくさん speaking できたこと。
- ・一人の講師が10日間、同じクラスを担当するのではなく、三人の講師の方が交代して3つのクラスを受け持ち、色々な先生ともっとコミュニケーションがしたかった。

4. 2. 4 動機づけについて

本項では、Keller (1983) による「ARCS 動機づけモデル」に基づき、アンケート結果を分類した。

「注意喚起、興味・関心 (Attention)」

- ・英語に関してもっと興味を持てるようになったこと。
- ・英語漬けの10日間がとても楽しかったです。英語が好きな人達に囲まれて勉強できたので、良い刺激を受けました。これからも英語力をのばせるように楽しみながら努力したいと思いま

す。

「関連性 (Relevance)」

- ・自分なりに普段から英語を使っていきたい。
- ・夏休み中だけでなく、定期的な社会人向けの講座があるとうれしい。
- ・プレゼンテーションもその物より、準備を仲間とすることで、日常会話の練習になった。とても楽しく勉強できました。宿題もあったので、結構ハードな2wでした。
- ・フランス語やドイツ語でも聞いて欲しい。英語で会話する努力をすることで英語がとても身近になった。英語の音楽がとても好きになった。
- ・Music や Movie を使用していただき、楽しく勉強できた。
- ・とても楽しかったし、夏休みが充実した。英語以外のこともたくさん学べました。
- ・夏だけでなく、他の季節にも集中英語講座を増やして欲しい。先生だけでなく、他のスタッフの方々の対応も良かったと思います。

「自信 (Confidence)」

- ・リスニング力が自分なりについたと思う。また、積極的に発言し、英語を話そうと努力できたこと。
- ・勉強したかった発音や Writing ができてよかったです。ありがとうございました。

「満足感 (Satisfaction)」

- ・とても有意義な時間を過ごせました。
- ・学生の方ともいっしょに学べたこともよい刺激となりました。
- ・ぜひ、今後もこうした講座を開講して欲しいと思います。
- ・また参加します。
- ・2週間とても有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。
- ・すごく充実した毎日でした。来年もこの講座があれば、是非参加させていただきます。
- ・みんなが話している人の話を真剣に聞き、参加する事がとてもよかったです。

5. 講座の意義と成果

5.1 教授法について：教授法の融合

先に記したように、本講座は、3つの英語教授法：Army Method, Audio-Lingual Method, Communicative Language Teaching を融合し、それぞれの講師の創意工夫により進められた。

アンケート結果（選択式）（表1）から、本講座の評価に関する点について、「素晴らしい」および「良い」と回答した受講者が31名で全体の97%を占める。また、英語力の向上について、28名が「向上した」と回答をし、全体84%を占めることから、本講座は受講者から高い評価を得たと解釈することができる。

さらに、「英語のシャワーをあびることができてよかった」、「一日中英語ですごせてよかった」など（4.2.1 参照）から Army Method の集中的指導の点、「自分の苦手な文法を中心に行ったり、発音を詳しく教えてもらったりすることができて良かったです」「発音を直してもらえた」

など(4.2.2参照)から、AL法におけるパターン・プラクティスが学習者の満足度つながった。「英語でコミュニケーションをとる機会が多かったことがよかった」など(4.2.3参照)からCLTで、実際にコミュニケーションをとる点が多かったことが確認できた。

5.2 動機づけについて

受講者は、アンケート回答欄に、数日後、米国に留学に行く者、企業への就職のためや教員採用試験のために英語力を向上させたいと思っていることや、英語圏の人々とコミュニケーションをし、かつ、TOEICや授業での成績を上げたいと思っていることを記述している。このことから、受講者は、integrative motivation(統合的動機)とinstrumental motivation(道具的動機)のどちらか、および、これら二つの動機を持っていることが判断できる。

ARCSモデルにしたがって、学習意欲の要因を受講者のアンケート結果(4.2参照)から考察してみる。まず、「刺激をうけた」、「楽しかった」という注意の側面があることがわかる。次に、「自分なりに普段から英語をつかっていきたい」など、学習課題が何であるかを知り、やりがいを感じたという「関連性」の側面に気づく。課題の将来的価値のみならず、プロセスを楽しんでいることも感じられる。また、「リスニング力がついた」という回答から、成功の体験を重ね、自分の努力に帰属できれば「やればできる」という「自信」が刺激されたと伺える。学習を振り返り、努力が実を結び「とても有意義であった」との「満足感」が得られていることがわかり、次への意欲につながっていくと推察できる。

また、講師が一人一クラス担当するのではなく、3つのクラスを交代で担当し、色々な講師と触れ合うことが求められ(4.2.3参照)、CLTの教授法により、受講者のコミュニケーションに対する動機づけが高まったと解釈することができる。

6. まとめと今後の課題

外国語教育は、ある社会のある時代の要請に応えるよう変化していく。教授法もその時々求められる外国語能力を育成するよう変遷を重ねてきている。本学夏季英語集中講座では、口羽(2007)で高く評価しているArmy Method、およびArmy Methodを基に発展したAL法を取り入れることに始まった。そして、国際環境の変化と外国語学習者とその学習目的の多様化から、現在は言語能力(language competence)よりも運用能力(performance)を重視する傾向にあるため、CLTを融合し、それぞれの講師の特性を生かした言語環境を教室内で作り上げた。

本論では、本講座開設の背景、目的、特徴を解説し、どのような点で効果的であったか、また、どのような点に考慮したらより向上するのかについて分析した。

その結果、3つの教授法を融合したことで、受講者の学習目的、ニーズにあった教授法の展開ができたこと、受講者の動機づけ(「注意」「関連性」「自信」「満足度」)(Keller 1983)が高まったこと、がアンケート結果より明らかになった。尚、要望される点として、一人の講師だけでなく、色々な講師からの指導を受けることを望んでいることが指摘され、受講者は、さまざまな講師とのコミュニケーションを求めていることが明らかになった。

今後も外国語教授法は、時代とおかれた環境と関連分野の研究発展によって変化していくであろう。本学英語講座も、学習者のニーズ、時代の要請に即して、教授法を開発していきたい。

参 考 文 献

- Dornyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fries, C. C. (1945). *Teaching and learning English as a foreign Language*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley, MA: Newbury House.
- Jacobs, H., Zingraf, S., Wormuth, D., Hartfiel, V. F., & Hughey, J. (1981). *Testing ESL composition: A practical approach*, Rowley, MA: Newbury House.
- Keller, J. M. (1983). *Motivational design of instruction*. In C.M. Reigeluth (Ed.), *Instructional-design theories and models: An overview of their current status*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 口羽益生 (2007) 『読み書き会話の基本を10日間で徹底的に修得するプログラム—第二次大戦中米軍情報将校速成のために開発された集中的語学訓練法によって—』未刊行ショートレター
- Nunan, D. (1991). *Communicative tasks and the language curriculum*. *TESOL Quarterly*, 25(2), 279-295.
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則. (2005). 『英語教育用語辞典』. 大修館書店.
- 田崎清忠 (1995). 『現代英語教授法総覧』大修館書店.

謝 辞

本研究にあたり、岐阜聖徳学園大学・口羽益生学長より多大なるご助言をいただいた。また、データ収集にあたり、兼山崇氏、後藤聖子氏にご協力をいただいた。心より感謝申し上げます。受講生の皆様には、アンケート資料ご提供にあたり心より感謝申し上げます。

